

豊山学報・第66号  
弘法大師御生誕千二百五十年  
記念特別号抜刷  
令和5年3月発行  
真言宗豊山派総合研究院

# 『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ

名 取 玄 喜

# 『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ

名 取 玄 喜

## 1. 本稿の目的

死後に悪趣、すなわち地獄・餓鬼・畜生に転生する原因となる自身の罪や業障をいかにして浄化し取り除くか。また、悪趣に転生した可能性のある他者をいかにして救済するか。時代や所属する集団によって関心の度合に差はあるが、業報・輪廻の概念が来世観の根底にあるインド仏教徒はつねにこの問題と向き合いながら、さまざまな対策を考案してきた。本稿で取り上げる『九仏頂タントラ (*gTshug dgu'i rgyud*)』は、そうした営みの集大成のひとつとして登場した経典である。

『九仏頂タントラ』という名前は、中心となるマンドラの構成に基づくチベットにおける通称であり、正式には『一切悪趣清浄儀軌一分 (*Sarvadurgatipariśo-dhanatejorājasya tathāgatasya arhato samyaksambuddhasya kalpaikadeśa*)』という。現在チベット大蔵経にはこれとほぼ同じ経題のテキストがもう1本収められており、こちらはチベットにおいて『清浄タントラ (*sByong rgyud*)』と通称される。『清浄タントラ』は9c前半以前の成立と考えられ、チベット語訳のみ伝存する。一方、『九仏頂タントラ』は11～12c頃までの成立と考えられ、ネパール系の梵文写本が残されている。

『清浄タントラ』と『九仏頂タントラ』はいずれも全3章からなるが、その内容は第1章と第3章において大きく異なっており(次項図1参照)、これまでの研究によって、『清浄タントラ』を改編して『九仏頂タントラ』が成立したこと、そして『九仏頂タントラ』の第1章と第3章がアーナンダガルバの著作と平行

『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ(名取)

関係にあることが知られている。

この改編の指摘は比較的早くになされており、プトウン (Bu ston rin chen grub, 1290-1364) は著書『総タントラ部解説』の中で「『九仏頂タントラ』第1章は『九仏頂儀軌』と『一切金剛出現』に、第3章は『一切金剛出現』に概ね等しい」と述べ<sup>1</sup>、瑜伽タントラの学匠アーナンダガルバ (ca. 8～10c) が著したマンダラ儀軌『九仏頂儀軌 (\**Sarvadurgatipariśodhanamaṇḍalavidhi*)』と『一切金剛出現 (*Sarvavajrodāyā*)』を典拠として挙げ、『清浄タントラ』にこの2つの儀軌を組み込むことで『九仏頂タントラ』が成立した可能性を示唆している。

このうち第1章については、酒井 [1978]・高橋 [1990] 等によって関連文献の対応が示され、プトウンの指摘の妥当性が確認された。一方、第3章については従来未検討だったが、筆者は先に、『九仏頂タントラ』第3章が実際には『一切金剛出現』ではなく、同じアーナンダガルバの著作『降三世出現 (\**Trailokyavijayodayā*)』と平行関係にあること、その他に『蕤呬耶経 (\**Sarvamaṇḍalasāmānyavidhiguhyatantra*)』との平行箇所も存在することを明らかにした。また併せて、『九仏頂儀軌』の構成の分析を通じて『九仏頂タントラ』の編纂意図を考察した(名取 [forthcoming])<sup>2</sup>。

考察の要点を述べると、『九仏頂儀軌』にはマンダラ成就法・灌頂儀礼・護摩それぞれに基づく3通りの葬送法が説かれていると考えられるのだが、『九仏頂タントラ』は、『清浄タントラ』の第1章に『九仏頂儀軌』と『一切金剛出現』からマンダラ成就法と死者儀礼を、第3章に『降三世出現』と『蕤呬耶経』から灌頂儀礼、また『清浄タントラ』第1章所説の茶毘護摩を組み込むことで、『九仏頂儀軌』所説の3通りの葬送法を実践するためのマニュアルとして作り出されたのではないか、ということである。

ただし先の考察では、①『九仏頂タントラ』とアーナンダガルバの著作の前後関係、②『九仏頂儀軌』と『九仏頂タントラ』の第1章の比較から窺われる編纂方法の2点について、註で触れるに留まり、充分に論述することができなかった。①は考察の前提に関わる問題であるため、より詳しく述べておく必要がある。②はその具体的な様相を示すことで、『九仏頂タントラ』編纂の全体像がより明

確になると考える。

本稿ではこの2点を取り上げることで、先の考察の不足を補うこととしたい。具体的には、まず①について、関連文献の概要を確認し、『九仏頂タントラ』が『九仏頂儀軌』に基づいている可能性が高いことを示す。次に②について、『九仏頂タントラ』と『九仏頂儀軌』の第1章を比較することで、どのような編纂方法が取られているのかを明らかにする。最後にこの2点と先の考察を踏まえて、『九仏頂タントラ』の成立に至る流れを考えてみたい。

## 2. 『九仏頂タントラ』とアーナンダガルバの諸儀軌の前後関係

上述のように、『九仏頂タントラ』には灌頂儀礼を主題とするアーナンダガルバのマンダラ儀軌『九仏頂儀軌』『一切金剛出現』『降三世出現』との平行箇所が存在するが、これらの儀軌と『九仏頂タントラ』の前後関係については、後述するように酒井 [1978] と乾 [1989] で見解が分かれている<sup>3</sup>。

そこでまず、先行研究と筆者の現時点での理解に基づいて関連文献の概要を述べ、『九仏頂タントラ』に見られる編纂の痕跡を指摘することで、『九仏頂タントラ』がアーナンダガルバのマンダラ儀軌に基づいて作成された可能性が高いことを示しておきたい。

なお名取 [forthcoming] に記載した『清浄タントラ』・『九仏頂タントラ』・平行文献の対応関係 (図1) と、本項で述べる関連文献の相関図 (図2) を予め示しておく。若干煩雑であるが併せて参照されたい。

まず『一切金剛出現』と『降三世出現』は、それぞれ『真実撰経』の金剛界品と降三世品に基づくマンダラ儀軌である。両儀軌は基づく章品の内容の違いから真言や観想法が異なるが、前半に阿闍梨の前行としてのマンダラ成就法、後半に弟子への灌頂儀礼の方法を説くという全体の枠組みや、次第の構成と順序は概ね共通し、次第の内容についてもある程度詳しく述べられている。同様の体裁をとるマンダラ儀軌として『清浄タントラ』第1章の普明マンダラに基

『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ（名取）

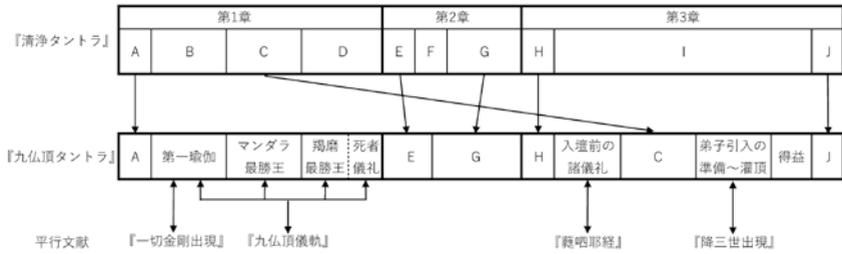


図1（名取 [forthcoming] より。→は移設、↔は平行関係を表す）

- A：ヴィマラマニプラバの後生を巡る釈尊と帝釈天らの問答・普明マンドラ諸仏の心呪<sup>4</sup>・マンドラ説示の懇請
- B：普明マンドラの説示・マンドラの成就法・投華・三昧耶水授与等
- C：三昧耶の説示・灌頂・パタの成就法・死者の脱悪趣のための諸儀礼・荼毘護摩法等
- D：釈尊によるタントラの功德の説示と諸天の称讃等
- E：釈迦牟尼マンドラの説示
- F：ヴィマラマニプラバの過去の因縁譚
- G：業障浄化・非時死の回避等を目的とする8種のマンドラ・灌頂・四種護摩法の説示
- H：転輪マンドラの説示
- I：転輪マンドラの印言等・忿怒火焰マンドラの説示・四種護摩法の説示
- J：讃歎

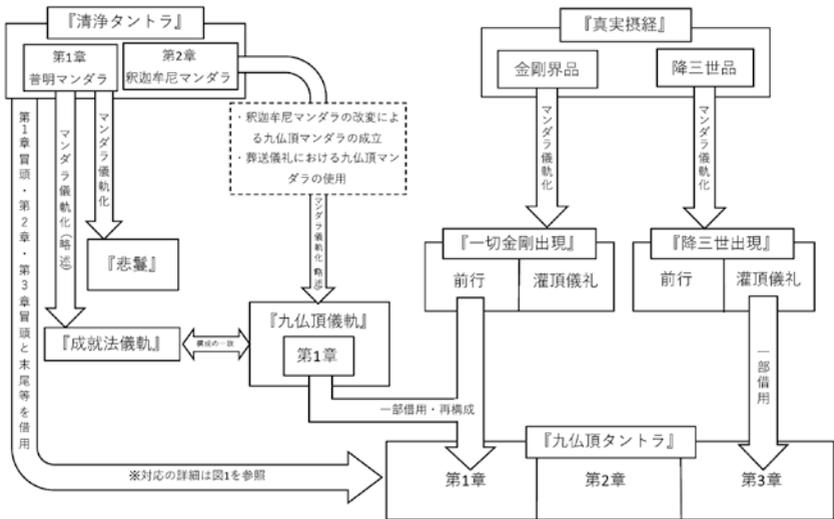


図 2

づく『悲鬘 (\*Kṛpāvalī)』があり、これらの著作からはアーナンダガルバが考える瑜伽階梯の灌頂儀礼の基本的な実践方法を知ることができる<sup>5</sup>。

また、普明マンドラに基づくマンドラ儀軌として、『悲鬘』の他に『一切悪趣清浄大曼荼羅成就法儀軌 (\*Savadurgatipariśodhanamahāmaṇḍalasādhanoṣīkā)』(以下『成就法儀軌』)がある。『成就法儀軌』はおおよそ6つの章(cho ga 儀則)から成り、第1章において阿闍梨の前行としてのマンドラ成就法が説かれ、第2章から第6章では弟子への灌頂儀礼が説かれる。

ただし、上記の3著作が散文主体で説明的な記述を含むのに対して、『成就法儀軌』はすべて偈頌で記され、次第の項目や真言のみ示して「以前に述べた儀軌を参照すべし」と所作等の詳細を省略する箇所が散見されるなど、その内容は略述的である。とくに全体の半分以上の分量を占める第1章の前行部分は比較的詳しく説かれるが、後半の灌頂儀礼部分は簡略で、弟子の受認次第や弟子の引入作法といった、阿闍梨と弟子の所作に関わる内容が説かれていない。もっとも、『成就法儀軌』に説かれぬそれらの次第は、アーナンダガルバの規定す

『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ(名取)

る灌頂において概ね共通した内容で行われることから、後半の灌頂儀礼部分に関しては、普明マンダラの灌頂に独自のトピックだけを抄出したものとも考えられる。

本稿で取り上げる『九仏頂儀軌』も、この『成就法儀軌』と同様に6章立てですべて偈頌で記され、構成もほぼ同じくする略述的な儀軌である。ただし『成就法儀軌』が普明マンダラの儀軌であるのに対して、『九仏頂儀軌』は九仏頂マンダラの儀軌として著されている。

頼富[1990]によれば、九仏頂マンダラは『清浄タントラ』第2章冒頭に説かれる釈迦牟尼マンダラを金剛界の五部立てに改変したものとされ、中尊釈迦牟尼の四方に金剛・宝・蓮華・一切、四維に光・幢・利・傘蓋の八仏頂尊、その周囲に内外八供養、賢劫十六尊、四摂を配する形を基本とする<sup>6</sup>。

初期密教經典に登場する仏頂尊はしばしば死者の罪業消滅や悪趣からの救済と結びついて説かれているが、釈迦牟尼の周囲に八仏頂を配する九仏頂マンダラも葬送と関係が深かったようである。チベット大蔵經に収められている、九仏頂マンダラを説く經軌の多くは、荼毘護摩や死者に対する灌頂などの死者儀礼を主題としている。

『九仏頂儀軌』も第5章「南門で行うべき儀軌」において、九仏頂マンダラの南門に灌頂壇を築いて死者の骨や衣服等を安置し、白芥子を打ち付け洗淨することで業障を除いたり、灌頂を授ける等の死者儀礼が説かれており、この次第は『成就法儀軌』には含まれないことから、本書が死者儀礼の執行を主眼に著されたものであることがわかる。なお『九仏頂儀軌』には法賢による漢訳『仏說大乘觀想曼拏羅淨諸惡趣經』(996年訳出)が現存するが、これは『九仏頂儀軌』とは章の順序や内容が若干異なることから、伝承系統を異にする別本と考えられる。

次に、『九仏頂タントラ』の大まかな構成を示すと、第1章の冒頭、第2章、第3章の冒頭と末尾は『清浄タントラ』と同一内容であり、第1章の冒頭以降は『九仏頂儀軌』と『一切金剛出現』、第3章の中間部は『降三世出現』と『蕤咽耶經』と平行関係にある。ここで問題となるのは、両者の前後関係、すなわちアーナ

ンダガルバの儀軌に基づいて『九仏頂タントラ』が成立したのか、あるいはアーナンダガルバが『九仏頂タントラ』を素材として儀軌を著したのかという点である<sup>7</sup>。

管見の限り、『九仏頂タントラ』に言及する最も古い文献はアバヤーカラグプタ (ca. 11～12c) の著作『ニシュパンナヨーガーヴァリー』であり、悪趣清淨マンダラを説く同書第22章に『九仏頂タントラ』固有の一文が引用される<sup>8</sup>。したがって『九仏頂タントラ』成立の下限は同人の活動年代に置くことが出来る。一方、アーナンダガルバの活動年代には諸説あるが、大体8～10cと考えられており<sup>9</sup>、アバヤーカラグプタよりは下る可能性が高い。

しかしこの二人の年代差を以て、直ちにアーナンダガルバの諸著作が『九仏頂タントラ』に先行するとは判断できない。アーナンダガルバの時代に『九仏頂タントラ』が存在し、それを偈頌の形に略述することで『九仏頂儀軌』が著された可能性も、両者の内容を比較する限りでは排除できないからである。実際に酒井 [1978] は、『九仏頂タントラ』を「抄出翻案構成」することで『仏説大乗觀想曼拏羅淨諸惡趣經』が著されたと考えている。

これに対して乾 [1989] は、アーナンダガルバが成就法の区分として多用する三種三摩地が、仏説である『九仏頂タントラ』に見られるのは不自然であること、アーナンダガルバが『九仏頂タントラ』に全く言及しないこと等の理由を挙げ、それらの成立に関して、まず『清淨タントラ』第2章の釈迦牟尼マンダラから九仏頂マンダラが創出され、その九仏頂マンダラの流行を背景として『九仏頂儀軌』が著され、後に『九仏頂儀軌』『一切金剛出現』の影響下で『九仏頂タントラ』が成立したとの考えを示している。

筆者も乾氏と同じく、アーナンダガルバの儀軌に基づいて『九仏頂タントラ』が成立したと考えているが、その根拠として乾氏の所論に加え、『九仏頂タントラ』第3章中に『降三世出現』所説の降三世大マンダラの主尊降三世と十六大菩薩の三昧耶印が説かれていることを挙げておきたい。

すなわち『九仏頂タントラ』第3章中の『降三世出現』との平行箇所には、九仏頂マンダラに登場しない降三世大マンダラの主尊降三世と十六大菩薩の三

『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ(名取)

味耶印の結印法が説かれている。これは当該の平行箇所が『降三世出現』から借用された際に、『九仏頂タントラ』には必要のない部分が削除されずに取り残されたものと考えられるのであり、『九仏頂タントラ』中の平行箇所が『降三世出現』に由来することを強く示唆する<sup>10</sup>。第1章にはこうした明らかな編纂の痕跡はないものの、このことから筆者は、『九仏頂タントラ』第1章もアーナンダガルバの儀軌に基づいている蓋然性は高いと考えている。

では『九仏頂タントラ』第1章が『九仏頂儀軌』と『一切金剛出現』に基づいているとして、その編纂はどのような方法でなされているのか。次項に第1章の次第構成の比較を通じて確認する。

### 3. 『九仏頂儀軌』と『九仏頂タントラ』の 第1章の比較

『九仏頂儀軌』『九仏頂タントラ』双方の第1章に説かれる九仏頂マンダラの成就法は、いずれもアーナンダガルバが多用する三種の三摩地、すなわち第一瑜伽(ādiyoga)、マンダラ最勝王(maṇḍalarājāgrī)、羯磨最勝王(karmarājāgrī)によって三段階に区分される。第一瑜伽は観想による本尊・マンダラと阿闍梨との合一、マンダラ最勝王はマンダラの生起、羯磨最勝王は諸尊の功德事業(後述)の観想、供養、讚歎等によるマンダラの加持を主な内容とし、各三摩地はさらに複数の次第に細分される。両者の次第とその対応を示すと、別表1ようになる<sup>11</sup>。

両者の次第は大体において対応するが、先述したように『九仏頂儀軌』の方は偈頌で記され、次第の項目名のみ挙げる箇所があるなど略述的であり、とくに羯磨最勝王は2偈でその概要が示されるのみとなっている。また、構成上の特徴として、マンダラ諸尊の四印の結印法と心呪、及びマンダラの供養法が羯磨最勝王の後にまとめて置かれるという点が挙げられる。

一方、『九仏頂タントラ』は概ね『九仏頂儀軌』に基づいており、逐語的に一致している箇所も多いが、偈頌の箇所を散文に変更したり、『一切金剛出現』の文言に依拠することによって、『九仏頂儀軌』では略述されている次第の内容を

補っていると考えられる箇所が、主に第一瑜伽の前半部分を中心に複数ある。

『九仏頂儀軌』の第一瑜伽の末尾の讃頌とマンダラ最勝王全体はそのままの形で『九仏頂タントラ』に転用されているので<sup>12</sup>、以下には第一瑜伽の残余部分と羯磨最勝王について、『九仏頂タントラ』に立脚しながら『九仏頂儀軌』との対応を確認し、編纂の特徴について考察する。なお『一切金剛出現』との対応についても適宜言及する。

### 第一瑜伽

まずマンダラ説示の契機となる冒頭部 §1 五成就から §30 マンダラ説示までは、『清浄タントラ』の内容がそのまま用いられている。ただし『清浄タントラ』では中尊を囲む八仏頂の心呪 (§18 に相当) のみを説くのに対して、『九仏頂タントラ』では中尊と八仏頂に加えて、内外八供養・四摂・賢劫十六尊の心呪 (§19～25) が説かれる。これらは『九仏頂儀軌』の §58～67 に説かれるものに一致する。

続く §31 着座から §119 讃頌〈十方諸天〉までが第一瑜伽の具体的な修法内容となるが、便宜的に①場所の加持とマンダラの供養 (§31～80)、②自身への灌頂 (§81～95)、③四印による自身加持 (§96～119) に大別して見て行く。

まず①場所の加持とマンダラの供養については、高橋 [1984a] が指摘するように、§31 着座から §79 発菩提心戒が『一切金剛出現』とほぼ同一の文言であり、これによって『九仏頂儀軌』ではごく簡略に説かれる §4 守護輪と §10 供養、及び言及されないマンダラ礼拝の具体的な内容が補填される形となっている。ただし細かく見ると、§50 普礼～§54 四礼〈北方礼〉の礼拝の真言において、『一切金剛出現』では『真実撰経』の重要語である sarvatathāgata (一切如来) となっている箇所が、『清浄タントラ』の主尊のエピテート sarvavid (全智者) に変更されている。また、二十種供養のうち §58 (1) 花供養～§64 (7) 劫樹供養では、『一切金剛出現』に見られる奉獻文<sup>13</sup>が見られず、真言のみとなっている。逆に、願・方便波羅蜜供養に相当する §72 (15) 燈供養と §73 (16) 塗香供養は、『一切金剛出現』には対応する次第がない。

次に②自身への灌頂では、まず自身の罪業を消滅させるための印・真言等の

『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ(名取)

作法が説かれる (§81 加持護念・真言～§84 障碍挙揚)。このうち §82 召罪真言と §83 摧罪真言について、『九仏頂儀軌』の §56・57 では真言のみ説かれるが、『九仏頂タントラ』ではこれに『金剛頂経』「降三世品」§983・984 所説の印が組み合わされている。

続いて心中にマンダラを観想し (§85 観マンダラの真言・§86 観マンダラ)、そのマンダラにおいて自身に灌頂を行う次第が説かれる (§87 マンダラ遍入～§95 金剛誓戒)。『九仏頂儀軌』では、自身の心中にマンダラを観想した後 (§13・14)、釈迦牟尼の根本心呪が放つ光明によって衆生が悪趣から引き上げられ (§15)、その衆生に対して灌頂を行うこと (§16) が説かれる。灌頂の方法については「水 [灌頂] 等によって灌頂を次第通りに与える」とのみあり具体的な方法の言及はない。この次第は悪趣からの救済という『一切悪趣清浄儀軌』のテーマそのものに関わる重要な観想法だが<sup>14</sup>、『九仏頂タントラ』にはこれに対応する次第がなく、若干簡略ではあるが概ね『一切金剛出現』と同様の文言によって、自身への灌頂の次第が説かれる。

次に③四印による自身加持では、自身の身体の各所を諸尊の四印で加持し、自身をマンダラと一体化させる観想法が説かれる。まず自身加持 (ātmaḍhiṣṭhāna) の真言 (§96) を唱えつつ、自身加持の印で身体の各所を加持する (§97)。ここでは『九仏頂儀軌』の §54・55 がそのまま用いられている。続く §98 自身三昧耶・§99 金剛集会では、マンダラと自身を、尊格の自我 (ahaṃkāra)、心呪、四撰真言などを以て一体化する観想法が説かれる。『九仏頂儀軌』ではその方法についての具体的な言及はなく、また『九仏頂タントラ』の説明も非常に簡潔だが、『一切金剛出現』の当該箇所では諸尊の心呪や身体における配置場所等が仔細に述べられている。

続いてマンダラ諸尊の四印が説かれる (§100 三昧耶印縛〈九仏頂〉～§111 賢劫十六尊の羯磨印〈北方四菩薩〉)。このうち内外八供養と四撰の三昧耶印及び羯磨印は、『九仏頂儀軌』では『根本タントラ』(=『真実撰経』)と同じであるので説かないと省略されるが、『九仏頂タントラ』では「金剛界品」§270・§289・§290 所説の印が組み込まれている (§101～103・§106・107)。

## 羯磨最勝王

アーナンダガルバの三種三摩地の意義を考察した杉木 [1995] によれば、羯磨最勝王の目的は、マンダラの尊格の特性を象徴する行為（功德事業）を念ずることによって「慈悲行為の場としての曼荼羅の意味を行者の意識の中で堅固にすること」であるとされ、『一切金剛出現』と『悲鬘』ではマンダラの尊格それぞれの功德事業が列挙されている。また、アーナンダガルバの諸儀軌に共通する特徴として、羯磨最勝王の後に諸尊の招請、供養、発遣を主な内容とする「供養親近次第」が説かれることが挙げられる。これは羯磨最勝王とは別の次第であり、その目的は「諸尊を曼荼羅に招請して供養して一体化しつつその加持力を受けること」とされる<sup>15</sup>。

さて『九仏頂儀軌』では、羯磨最勝王は §43 において「釈迦獅子に面前して、一切をマンダラに住さしめ、一切の悪趣より出さしむことが、羯磨最勝王と称される」<sup>16</sup>と、その概要のみが示される。また、供養親近次第は、§68 開門から §70 供養等がこれに当たる。

一方、『九仏頂タントラ』では、『一切金剛出現』において功德事業の観想に先立って行われる諸尊の集会の観想<sup>17</sup>が、諸尊の集会の円満を観想する §142 根本マントラに相当すると考えられるが、功德事業の観想に相当する内容は見られない。供養親近次第については、§143 開門から §148 讚頌（執金剛阿利沙偈）までがこれに当たる。そして『九仏頂タントラ』では続けて、『九仏頂儀軌』第5章「南門で行うべき儀軌」に基づく死者儀礼（§149 諸供養～§152 護摩）が説かれており、ここまでが羯磨最勝王とされている。この死者儀礼は、死者の衣や遺骨に白芥子を投げつけ洗浄することによって悪業を除去し、死者の行く道を浄め示すことで天界に転生させるというものである。『九仏頂儀軌』ではマンダラ成就法とは別の章に説かれているが、独立した儀軌ではなく、事前にマンダラ成就法を修することが前提となっている<sup>18</sup>。

このように『九仏頂タントラ』の羯磨最勝王は、アーナンダガルバの他のマンダラ儀軌と異なり、通常は別立てされる供養親近次第と、遺骨洗浄等の死者

『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ(名取)

儀礼という2つの儀礼ユニットによって構成されているが、第1章全体を通して見ると、「観想によってマンダラ諸尊と合一し、マンダラを生起し、諸尊の加持力を被った阿闍梨が、死者儀礼によって死者を天界へと転生させる」という、死者の遺物を面前にして行う一連の儀礼を説く形となっていることが分かる。つまり『九仏頂タントラ』では、『九仏頂儀軌』が想定するところのマンダラ成就法に基づく死者儀礼が、恐らく実際の使用を前提として再構成されていると考えられるのである<sup>19</sup>。

なお細かい対応を見ると、『九仏頂儀軌』§70 供養等では、供養の内容は「前に説いた種々の供養によって正しく供養する」「無等」等の讚で称讃する」と等と略述されるが、§145 漱口水等から§148 讚頌では、灑浄、漱口に始まる諸供養がいくつかの真言とともに示され、また「無等」等の讚(通称「執金剛阿利沙偈」)については全文が示されるなど、比較的詳細に説かれる。

以上の比較から、『九仏頂タントラ』第1章の編纂方法として次の点が指摘できよう。

- ・基本的には『九仏頂儀軌』の文言を用いつつ、『九仏頂儀軌』で省略されている真言・印や文言を『一切金剛出現』等の他文献から補填している。その際、§50 普礼の真言に見られるように、経典の性格に沿った変更がなされている。
- ・アーナンダガルバの成就法の次第順序に沿って、『九仏頂儀軌』の真言や印を配置し直している。
- ・遺骨洗浄等の死者儀礼を羯磨最勝王の最後に組み込むことで、第1章全体でマンダラ成就法に基づく死者儀礼としている。

これらの点から、『九仏頂タントラ』第1章は、全体としては『九仏頂儀軌』所説のマンダラ成就法に基づく死者儀礼を意図し、その実修に適した形に『九仏頂儀軌』第1章を再構成したものといえる。

#### 4. 『九仏頂タントラ』成立の流れ —まとめに代えて—

本稿では、『九仏頂タントラ』第3章中の『降三世出現』との平行箇所、九仏頂マンダラに登場しない降三世大マンダラの尊格の印が存在する、という編纂の痕跡を指摘し、『清浄タントラ』にアーナンダガルバのマンダラ儀軌を組み込むことで『九仏頂タントラ』が成立した可能性が高いことを示した。また、『九仏頂儀軌』と『九仏頂タントラ』の第1章の次第比較を通じて、『九仏頂タントラ』第1章が『九仏頂儀軌』所説のマンダラ成就法に基づく死者儀礼の実修に適した形に再構成されたものであることを指摘した。

最後に、先の名取〔forthcoming〕で考察した『九仏頂タントラ』の編纂意図を踏まえて、『九仏頂タントラ』成立の流れを粗描することでまとめに代えたい。

まず『清浄タントラ』の成立後、死者の救済と関係の深い仏頂尊を配する第2章の釈迦牟尼マンダラから九仏頂マンダラが創出され、アーナンダガルバはそのマンダラ儀軌として『九仏頂儀軌』を作成した。『九仏頂儀軌』にはマンダラ成就法、灌頂儀礼、護摩のそれぞれに基づく3通りの葬送法が説かれているが、その記述は『成就法儀軌』と同じく略述的であるため、『九仏頂儀軌』のみによって実修することは難しかったものと思われる。

そこである時期（アーナンダガルバ以降アバヤーカラグプタまでの間）に、『九仏頂儀軌』の葬送法を実修するためのマニュアル——略本としての『成就法儀軌』に対する広本としての『悲鬘』のような——が要請され、それに応えるものとして『九仏頂タントラ』が作り出されたと考えられる。『九仏頂タントラ』は、『清浄タントラ』第1章に『九仏頂儀軌』と『一切金剛出現』のマンダラ成就法及び死者儀礼、第3章に『蕤呬耶経』と『降三世出現』の灌頂儀礼、並びに『清浄タントラ』第1章の荼毘護摩を組み込むことで作成され、これによって『九仏頂儀軌』所説の3通りの葬送法に対応する内容を具えるものとなっている。

その際、第1章に関しては上述の如く、成就法の流れに沿った改変が適宜加えられている。また、第3章に関しては名取〔forthcoming〕を参照されたいが、

『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ(名取)

『九仏頂儀軌』に説かれない弟子の受認次第と弟子引入の作法が、それぞれ『蕤呬耶經』と『降三世出現』から補填されていると考えられる。

以上が現時点で考えられる『九仏頂タントラ』成立の流れである。今一步考察を進めるためには、より広い範囲の関連文献との比較検討が不可欠であり、編纂者の実態や成立地など解明すべき点も数多く残されているが、今後の課題としたい<sup>20</sup>。

#### 一次資料

『清浄タントラ』(『一切悪趣清浄儀軌』): *de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas ngan song thams cad yongs su sbyong ba gzi brjid kyi rgyal po'i brtag pa*, Śāntigarbha・Jayarakṣita 訳, Toh. 483, Ota. 116.

『九仏頂タントラ』(『一切悪趣清浄儀軌一分』)

梵文: 密教聖典研究会 [1986; 1987]

藏訳: *de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas ngan song thams cad yongs su sbyong ba gzi brjid kyi rgyal po'i brtag pa phyogs gcig pa*, Devendradeva・Chos rje dpal 訳, Toh. 485, Ota. 117.

『一切金剛出現 (Sarvavajrodāyā)』: *rdo rje dbyings kyi dkyil 'khor chen po'i cho ga rdo rje thams cad 'byung ba zhes bya ba*, Buddhaśrīśānti・Rin chen bzang po 訳, Toh. 2516, Ota. 3339.

『九仏頂儀軌 (\*Sarvadurgatipariśodhanamaṇḍalavidhi)』

藏訳: *ngan song thams cad yongs su sbyong ba'i dkyil 'khor gyi cho ga zhes bya ba*, Buddhaśrīśānti・Rin chen bzang po 訳, Toh. 2635, Ota. 3460.

漢訳: 『仏説大乘觀想曼拏羅淨諸惡趣經』法賢訳, T. Vol. 19, No. 939.

『降三世出現 (\*Trailokyavijayodayā)』: *dpal khams gsum rnam par rgyal ba'i dkyil 'khor gyi cho ga 'phags pa de kho na nyid bsdus pa'i rgyud las btus pa*, Rin chen bzang po 訳, Toh. 2519, Ota. 3342.

#### 二次資料

- Lindsay, Rory Brendan [2018] *Liberating Last Lites: Ritual Rescue of the Dead in Tibetan Buddhist Discourse*. University of Harvard, The Department of South Asian Studies, Doctoral thesis.
- Skorupski, Tadeusz [1983] *The Sarvadurgatipariśodhana Tantra: Elimination of All Evil Destinies*. Delhi: Motilal Banarasidass.
- Weinberger, Steven Neal [2003] *The Significance of Yoga tantra and the Compendium of Principles (Tattvasaṃgraha Tantra) within Tantric Buddhism in India and Tibet*. University of Virginia, Department of Religious Studies, Doctoral thesis.
- 伊集院栞 [2015] 「Ānandagarbha 著『降三世曼荼羅儀軌』の前行儀軌について」『印度学仏教学研究』64-1, pp. 435-432.
- [2021] 「アーナンダガルバ著 *Vajrajvālodayā* : 内容概観および「ヨーガのみによる成就法の手引き」説示箇所梵文テキストと註」『川崎大師教学研究研究所紀要』6, pp. (165)-(199).
- 乾 仁志 [1989] 「仏説大乘観想曼荼羅淨諸悪趣経について」『印度学仏教学研究』74, pp. 834-829.
- 遠藤祐純 [2016] 『プトン造『総タントラ部解説“タントラ部なる宝の妙厳飾”という書』『瑜伽タントラの海に入る船』和訳』ノンブル社.
- 加納和雄 [2022] 「宝性論の仏説観(2): ārṣa の語義と類型」『駒澤大学仏教学部研究紀要』80, pp. 53-92.
- 酒井紫朗 [1978] 「悪趣清浄軌について」『密教文化』123, pp. 1-25.
- 杉木恒彦 [1995] 「Ānandagarbha の曼荼羅成就法論」『インド哲学仏教学研究』3, pp. 33-46.
- スダン・シャキヤ [2002] 『『一切悪趣清浄タントラ (*Sarvadurgatipariśodhana Tantra*)』におけるマンドラ儀軌の一考察: Ānandagarbha 釈を中心に』『論集』29, pp.85-101.
- 高橋尚夫 [1984a] 「Sarvadurgatipariśodhanatantra (二): 校訂と和訳」『仏教思想論集: 那須政隆博士米寿記念』pp. 46-77.
- [1984b] 「Sarvadurgatipariśodhanatantra (三): 校訂と和訳」『豊山学報』28/29, pp. 1-39.

『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ(名取)

- [1985a] 「Sarvadurgatipariśodhanatantra (一)：校訂と和訳」『仏教の歴史と思想：壬生台舜博士頌寿記念』pp. 123-148.
- [1985b] 「Sarvadurgatipariśodhanatantra (四)：校訂と和訳」『豊山学報』30, pp. 1-33.
- [1986] 「Sarvadurgatipariśodhanatantra (五)：校訂と和訳」『豊山学報』31, pp. 1-17.
- [1990] 「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現：第一瑜伽三摩地品・西藏本校訂併梵文補填」『豊山学報』35, pp. 150-51.
- 立川武蔵 [2014] 「『ニシュパannaヨーガーヴァリー』「悪趣清浄マンダラ」の問題点」『印度学仏教学研究』63-1, pp. 434-427.
- 種村隆元 [2013a] 「Śūnyasamādhivajra 著作の葬儀マニュアル *Mṛtasugatiniyojana*：サンスクリット語校訂テキスト及び註」『東洋文化研究所紀要』163 pp. 110-136.
- [2013b] 「Śūnyasamādhivajra 著作の葬儀マニュアル *Mṛtasugatiniyojana*：訳語及び註」『Acta Tibetica et Buddhica』6, pp. 21-60.
- 名取玄喜 [forthcoming] 「『一切悪趣清浄儀軌』の編纂について：いわゆる『九仏頂タントラ』の典拠と編纂意図の考察」『密教学研究』56号
- 密教聖典研究会 [1986] 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyik-Sarvavajrodaya：梵文テキストと和訳 (I)」『大正大学総合仏教研究所年報』8, pp. 224-258.
- [1987] 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyik-Sarvavajrodaya：梵文テキストと和訳 (II) 完」『大正大学総合仏教研究所年報』9, pp. 222-294.
- 山口しのぶ [2016] 「ネパール：ネワール仏教の儀礼を中心に」『空海とインド中期密教』pp. 79-90.
- 頼富本宏 [1990] 『密教仏の研究』法蔵館.

[謝辞] 本稿執筆に際して、高橋尚夫先生が作成された『九仏頂儀軌』『仏説大乘観想曼荼羅淨諸悪趣經』『九仏頂タントラ』各第1章の詳細な対照テキスト及び和訳註を参照させていただきました。未発表の貴重な資料を恵与下さりました高橋先生の御厚意に記して感謝の意を表します。

註

- 1 *The Collected works of Bu-ston*, Vol. 15, Ba 157v3-158r5、当該箇所和訳は遠藤 [2016: 332-333]。
- 2 令和4年10月15日に種智院大学で開催された日本密教学会第五十五回学術大会において発表を行った。論文は『密教学研究』第55号に掲載予定である。
- 3 『九仏頂タントラ』と『九仏頂儀軌』に内容上密接な関係があることは Weinberger [2003: 155-156] でも指摘されているが、時代的な前後を含めテキスト間の具体的な関係については結論を保留している。
- 4 『九仏頂タントラ』では普明マンダラ諸仏の心呪が九仏頂マンダラ三十七尊の心呪に変更されている。
- 5 この3書と、本文以下に述べる『成就法儀軌』『九仏頂儀軌』の前行部分については、杉木 [1995] において次第の比較と相違点の指摘がなされている。また『一切金剛出現』と『降三世出現』の前行部分の比較研究として伊集院 [2015]、『一切金剛出現』と『悲鬘』の灌頂儀礼部分の比較研究としてスダン [2002] がある。
- 6 頼富 [1990: 257-263] を参照。なお『九仏頂儀軌』ではこの内院三十七尊の外側に三悪趣等が描かれるが、『九仏頂タントラ』では降三世品所説の三世輪大マンダラの五類諸天が配される。
- 7 通常は異なる2つの文献に平行箇所が存在する場合、2文献間の貸借のみならず両者に共通の源泉を想定する必要があるが、これについては高橋 [1984b: 2-3] において、『九仏頂タントラ』とアーナンダガルバの儀軌に共通する「原初的な儀軌」の存在が指摘されている。しかし、こと『九仏頂タントラ』に関しては先掲の図2に示し、また以下に述べるように、アーナンダガルバの諸儀軌を組み合んでいる可能性が高いため、少なくともアーナンダガルバの儀軌との平行箇所に限っては共通の源泉を想定しなくとも良いと筆者は考えている。但しアーナンダガルバはしばしば『真実撰経』等の根本タントラから文章をそのまま引用して儀軌を構成するため、そうした根本タントラとの平行箇所が孫引きの形で『九仏頂タントラ』中に見られることはある。
- 8 この引用については立川 [2014] で検討されている。立川氏は当該引用文中の「外マンダラ」(bāhyamaṇḍala) にある「二十八の月輪」(saṣṭaviṃśaticandramaṇḍala) の場所を問題としており、外マンダラを、内院三十七尊の外側にあり五類諸天が配

『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ(名取)

される円形の外院と考えている。しかしすでに酒井 [1978, note 7] で指摘されるように、外マンダラは内院の初重九尊を囲む二十八尊の場所、二十八の月輪はその尊格各々の住する月輪と考えるのが妥当であろう。なお立川氏はこの引用箇所を典拠不明とするが、当該箇所は Skorupski [1983: 162.1-2] である。

- 9 アーナンダガルバの年代については伊集院 [2021: note 2] を参照。
- 10 『九仏頂タントラ』中の『降三世出現』との平行箇所は Skorupski [1984: 250.6-296.25] で、このうち当該の三昧耶印は 260.25-262.8 である。
- 11 『九仏頂タントラ』の科段は高橋 [1984a; 1984b; 1985a; 1985b; 1986] に基づいている。『九仏頂儀軌』の科段は概ねこれに従って筆者が付したものである。
- 12 表中『九仏頂儀軌』の§17 讚頌〈九仏頂〉から§42 四摂菩薩は、『九仏頂タントラ』の§115～§140 に逐語的に対応する。酒井 [1978] を参照。
- 13 gang 'jig rten gyi khams 'di 'am/ gang yang phyogs bcu'i 'jig rten gyi khams thams cad na/ (Derge Tanjur, ku, rgyud 'grel, 4r1) という一文で始まり、供養の種類によって途中の文句を入れ替える定型文である。
- 14 杉木 [1995: note 26] を参照。
- 15 以上の羯磨最勝王と供養親近次第の説明については杉木 [1995: 37-38] を参照。
- 16 śā kya seng ge mdun byas te/ thams cad dkyil 'khor la bzhugs te/ ngan song thams cad las 'don pa/ las kyi rgyal po mchog ces bya (Derge Tanjur, rgyud 'grel, ju, 191v4)
- 17 高橋 [1988] による『一切金剛出現』の科段では§74 集会に当たる。
- 18 シューニヤサマーディヴァジュラの著書『ムリタスガティニヨージャナ』には、この『九仏頂儀軌』第5章所説の死者儀礼のほぼ全体が引用されているが、次のように三種三摩地を修した者が死者儀礼を行うとされる。tad anu tadasthi śarāve tasmin samsthāpayen niravaśeṣam | vihitasamādhitrayaḥ kuryāt pratyāṅgirām cāśya || 「その次に、彼 [=死者] の骨をその [皿の] 上に、余すことなく置くべきである。三三昧を修した [司祭] はその [死者] に対する悪しき効果の阻止 (pratyāṅgirām) を行うべきである」(テキストは種村 [2013a: 111]、和訳は種村 [2013b: 37-38] による)
- 19 『九仏頂儀軌』の羯磨最勝王の「釈迦獅子に面前して、一切をマンダラに住さしめ」が、マンダラの集会の完成を観想する§142～§148に、また「一切の悪趣より出

さしむこと」が、死者を天界に転生させる死者儀礼である §149～§152 にそれぞれ対応しているようにも見え、『九仏頂タントラ』が『九仏頂儀軌』の羯磨最勝王の記述を踏まえている可能性もある。なおネパールにおいては、現在でも三種三摩地による悪趣清浄マンダラの観想法が葬送儀礼の際に行われる。これについては山口 [2016] を参照。

- 20 推測の域は出ないが、最後に編纂者に関する若干の私見を記しておきたい。『九仏頂儀軌』の葬送法マニュアルを作成するに当たって、編纂者が『清浄タントラ』をベースとした背景には、アーナンダガルバという学僧の儀軌に基づきながらも、そこに『清浄タントラ』の伝説としての正当性や権威を付与しようとする意図があったのではないかと筆者は推測する。『九仏頂タントラ』が本来『清浄タントラ』の経題であった『一切悪趣清浄儀軌』の名を冠するのもその現れではないかと思われるが、しかし『九仏頂タントラ』ではアーナンダガルバの儀軌の文言は典拠の明示なく『清浄タントラ』の文言と直接繋げられており、これは学僧の言葉が釈尊の言葉として語られていることを意味する。著者自身がそのような伝説の捏造と捉えられかねない編纂を行うとは考え難いため、『九仏頂タントラ』の成立にアーナンダガルバ自身が関わっている可能性は低いと考えられる。

この仏典の編纂という問題を巡って、最近『宝性論』の伝説観を検討した加納 [2022] において、伝説の基準に関する大変示唆に富む指摘がなされた。非常に広範な論考であるため詳細は直接参照されたいが、関係する要点のみ挙げると、伝説の基準を説く『宝性論』第5章第18・19偈には、仏以外の者が発した言葉であっても、内容が伝説 (*ārṣaṃ vacas*) と一致していれば、「伝説の如きもの (*ārṣaṃ iva vacas*)」として実質的には伝説と変わらないとする、「内容を基準とする伝説観」が存在し、同様の考え方はアバヤーカラグプタ等の後代の学僧の著作にも認められるという。例えばアバヤーカラグプタは、仏陀の直説 *ārṣa* に対して、それを別の文字や順序で著述したり、要約や説明したものを *anvārṣa* (準伝説) と呼ぶが、*anvārṣa* であっても伝説と同様の効果や内容を具えていれば、実質的に伝説と認めるとの主張を展開する (特に加納 [2022] の第9節を参照)。

加納氏の重厚かつ精緻な考察の成果を安易に『九仏頂タントラ』に当て嵌めて考えることは慎まなければならないが、もしこれを援用できるならば、アーナンダガルバの著作を伝説に準ずるものとして奉ずる、アーナンダガルバ流と呼び得るよ

『九仏頂儀軌』から『九仏頂タントラ』へ（名取）

うな集団が存在し、そうした者たちの手で『九仏頂タントラ』が編纂された可能性も考えられるのではないか。アーナンダガルバは『真実撰経』を始めとする瑜伽タントラに通暁した学僧として著名である。その言葉を正しく仏説に由来し、仏説と同等の価値を有すると考える集団の中ならば、アーナンダガルバの言葉と『清浄タントラ』の文言を並置することも認められたかも知れない。

なお、アーナンダガルバ流が存在した可能性については、真言宗豊山派宗学研究所の所内会における発表の機会に、高橋尚夫先生よりご指摘頂いた。またその際、『九仏頂タントラ』が成立したと考えられるおよそ9～11cにかけては、例えば『サンプトードバヴァタントラ』のような、経典・儀軌・論書の折衷的なタントラが多く登場した時代であり、『九仏頂タントラ』もそうしたタントラ制作の流れの中に位置付けられるのではないかとのご指摘を、野口圭也先生より頂いた。加納氏が明らかにした「内容を基準とする仏説観」があればこそ、折衷的なタントラの制作が可能であったのかも知れない。貴重なご指摘を頂いた両先生にはこの場を借りて御礼申し上げる次第である。

別表 1

『九仏頂タントラ』		三摩地名
§	項目名	
1.	五成就(開・時・教主・処)	
2.	五成就(眷属)	
3.	一切聖地清淨三摩地	
4.	帝釈天の質問	
5.	世尊の成誓	
6.	帝釈天の質問	
7.	世尊の成誓と帝釈天の召請	
8.	宝無垢光天子の墮惡趣	
9.	救護の懇請	
10.	世尊の顯示	
11.	帝釈天の讚歎	
12.	天の殊勝の懇願	
13.	不空加持金剛三摩地の心真言	
14.	一切樂起清淨王の心真言	
15.	三惡趣の寂靜	
16.	秘密心真言等	
17.	根本の明呪	
18.	釈迦牟尼と八仏頂の心真言	
19.	内四供養の心真言	
20.	外四供養の心真言	
21.	四攝の心真言	
22.	賢劫十六尊の心真言(東方四菩薩)	
23.	〈南方四菩薩〉	
24.	〈西方四菩薩〉	
25.	〈北方四菩薩〉	
26.	三三摩地	
27.	心真言の誦持	
28.		
29.	帝釈天の懇請	
30.	マンダラ顯示	
31.	着座	
32.	金剛舌	
33.	金剛手	

『九仏頂儀軌』			
三摩地名	§	項目名	ロケーション 対応するVer. Bの§番号
	1.	着座	1875
	2.	舌加持	1875-6
	3.	手掌加持	1876-7

4.	守置輪	187r7-v1	\$34-45	34. 守置輪 35. 金剛テレーテリ 36. 甲冑 37. 金剛火 38. 金剛眼 39. 金剛佈畏眼 40. 金剛ヤクシヤ 41. 金剛頂鬘 42. 金剛索 43. 金剛幡 44. 金剛カリー 45. 金剛頂 46. 金剛羯磨 47. 金剛網 48. 金剛輪 49. マンダラ遷入 50. 普札 51. 四礼(東方礼) 52. 〈南方礼〉 53. 〈西方礼〉 54. 〈北方礼〉 55. 懺悔 56. 隨喜 57. 勸請 58. 二十種供養(1)花供養 59. (2)燒香供養 60. (3)燈供養 61. (4)塗香供養 62. (5)宝供養 63. (6)燼盛供養 64. (7)劫樹供養 65. (8)菩提心供養 66. (9)燼供養(布施) 67. (10)靈供養(待戒) 68. (11)歌供養(忍辱) 69. (12)麝供養(精進)
4.	守置輪	187r7-v1	\$34-45	34. 守置輪 35. 金剛テレーテリ 36. 甲冑 37. 金剛火 38. 金剛眼 39. 金剛佈畏眼 40. 金剛ヤクシヤ 41. 金剛頂鬘 42. 金剛索 43. 金剛幡 44. 金剛カリー 45. 金剛頂 46. 金剛羯磨 47. 金剛網 48. 金剛輪 49. マンダラ遷入 50. 普札 51. 四礼(東方礼) 52. 〈南方礼〉 53. 〈西方礼〉 54. 〈北方礼〉 55. 懺悔 56. 隨喜 57. 勸請 58. 二十種供養(1)花供養 59. (2)燒香供養 60. (3)燈供養 61. (4)塗香供養 62. (5)宝供養 63. (6)燼盛供養 64. (7)劫樹供養 65. (8)菩提心供養 66. (9)燼供養(布施) 67. (10)靈供養(待戒) 68. (11)歌供養(忍辱) 69. (12)麝供養(精進)
5.	結界	187v1	\$46-47	
6.	金剛輪	187v1	\$48	
7.	懺悔	187v2	\$55	
8.	隨喜	187v2	\$56	
9.	勸請	187v2	\$57	
10.	供養	187v3	\$58-78	

『』から『』まで『一切金剛出現』にほぼ一致

11.	律儀受持	187v2	\$79	70. (13)花供養(禪定)
12.	マンダラ供養・講仏	187v3-6	\$80	71. (14)麝香供養(智慧)
13	観マングラ	187v6	\$85	72. (15)燈供養(願)
14	観釈迦獅子	187v6-188r1	\$86	73. (16)塗香供養(方便)
15	光明講事業	188r1-3	対応なし	74. (17)身供養
16	灌頂(總略)	188r3-4	\$87-95	75. (18)語供養
				76. (19)心供養
				77. (20)秘密供養
				78. 廻向
				79. 發菩提心戒
				80. 仏徳を讀す
				81. 加持灌念・真言
				82. 召罪真言
				83. 摧罪真言
				84. 障礙奉揚
				85. 観マングラの真言
				86. 観マングラ
				87. マングラ遷入
				88. 投花得仏
				89. 解覆面
				90. 瓶の灌頂
				91. 五仏灌頂
				92. 中宵
				93. 金剛主灌頂
				94. 金剛名灌頂
				95. 金剛誓戒
				96. 自加持のマントラ
				97. 金剛印自加持
				98. 自身三昧耶
				99. 金剛集會
				100. 三昧耶印辨(九仏頂)
				101. (内四供養)(STTS 270)
				102. (外四供養)(STTS 270)
				103. (四摂)(STTS 270)
				104. 法印
				105. 羯磨印辨(九仏頂)



翔鷹殿勝王	43. 翔鷹殿勝王	191v4-5		
	44. 根本マントラ	191v5-6	\$142	142. 根本マントラ
	45. 三昧耶印纏(九仏頂)	191v6-192r1	\$100	143. 閻門
	46. 法印	192r1-2	\$104	144. 集会
	47. 翔鷹印(九仏頂)	192r2-4	\$105	145. 漱口水等
	48. 大印	192r4-5		146. 四印
	49. 翔鷹印(東方四菩薩)	192r5-7	\$108	147. 四波羅蜜・八供養
	50. (南方四菩薩)	192r7-192v2	\$109	148. 譚頌(執金剛阿利沙處)
	51. (西方四菩薩)	192v2-3	\$110	149. 諸供養
	52. (北方四菩薩)	192v3-5	\$111	150. 妙智の焔
	53. 法大闡印総説	192v5-6		151. 衣服洗滌
	54. 自身加持	192v6-7	\$96	152. 護摩
	55. 自身加持のマントラ	192v7-193r1	\$97	153. 終章
	56. 召罪真言	193r1	\$82	
	57. 懺罪真言	193r1	\$83	
	58. 新迦牟尼心呪	193r1-2	\$84(18?)	
	59. 八仏頂の心呪	193r2-3	\$18	
	60. 内四供養の心呪	193r3-5	\$19	
	61. 外四供養の心呪	193r5-6	\$20	
	62. 四摂の心呪	193r6-7	\$21	
	63. 賢劫十六尊の心呪(東方世)	193r7-193v2	\$22	
	64. (南方四菩薩)	193v2	\$23	
	65. (西方四菩薩)	193v2-3	\$24	
	66. (北方四菩薩)	193v3-4	\$25	
	67. 三三摩地	193v4-5	\$26	
	68. 閻門	193v5-6	\$143	
供養親近次第	69. 集会	193v6-194r1	\$144	
	70. 供養等	194r1-2	\$145-148	